

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には一部改めたところがある)

疫病は、都市や建築を、何度も大きく転換させ、作り変えてきた。歴史を振り返ってみても、ペストによって、中世の密集した街と狭い路地は嫌われ、ルネサンスの整然とした都市と、幾何学が支配する大ぶりの建築が生まれた。では、<sup>①</sup>今、コロナの後に、われわれは、どのような都市を作り、どのような建築を作らなければいけないのだろうか。

ひとつのテーマは、ハコからの脱却である。二〇世紀に、人々はハコに閉じ込められた。ハコの中で仕事をする方が効率がいいとされて、超高層ビルに代表される大きなオフィスビルや大工場に、一定時間閉じ込められて、働かされた。そのハコに出勤し、帰宅するために、再び鉄のハコに閉じ込められ、密を強要された。大きなハコで働き、通勤する人が、この世紀にはエリートとされた。<sup>②</sup> A 都市はハコに埋め尽くされ、ハコとハコの隙間も、鉄のハコの移動のための空間でしかなかった。この世紀は「<sup>③</sup>の世紀」ともいわれたが、人々の暮らしを見る限り、ハコに閉じ込められた人々は、<sup>③</sup>からは遠い存在に見えた。

実際にはハコに閉じ込められなくても、十分に効率的に仕事ができる技術を、すでにわれわれは手に入れている。今回のコロナ騒動によって、多くの企業がテレワークに踏み切ったが、「やればできたんだ」というのが、人々の感想であった。<sup>④</sup> やればできたものを、やらないままにいたつけが、このような形でわれわれに降りかかってきた。

ハコに閉じ込める仕事のやり方は、女性にも多くの犠牲を強いた。出産や子育ての時期には、ハコに通ってみんな仕事をするのが難しい。そのために多くの有能な女性が仕事から排除され、社会から排除されてきた。<sup>⑤</sup> そのような女性を再び社会が受け入れるきっかけを、今回の疫病が作ることにしなければ、社会が払ったこれだけの犠牲が浮かばれないだろう。

今回僕は、随分と歩いた。歩くことで体調を整え、また歩きながら様々なことを考え、様々なものを頭の中の紙の上でスケッチした。古代ギリシャのアリストテレスの一派は、歩廊で歩きながら講義を行い、<sup>⑥</sup> 逍遥学派と呼ばれた。歩きながら思考するという方法は、アリストテレスの師プラトン、その師であるソクラテスから学んだといわれている。僕は歩き疲れると公園のベンチで仕事をした。ハコの外にいても十分な仕事はできるのである。 B 普段は思いつかない新鮮な発想も生まれた。

歩くとは、人との距離を自由に選べるということでもある。密着したい時は、歩み寄って抱きしめればいいし、距離をとりたい時は、いくらでも遠ざかることができる。鉄のハコに詰め込まれて移動している時は、そうはいかない。歩くということは、いつも一人でいるということであり、自由であるということである。

公園は空調しなくても、充分に気持ちがいいが、ハコは空調し続けなければならぬ。昼間も照明で照らし続けなければならぬ。特に、最も効率がよいとされた大きなハコは、自然換気だけでは温湿度のコントロールができないので、空調が必須である。ハコの文明は C、空調文明でもあった。それは同時に石油文明でもあった。安い化石燃料を燃やすことで、ハコが成立していたが、このシステムが長くは続かないことに、人々は気づき始めていた。 D、ハコを出ようとは誰も思わなかった。ハコは作り続けられていたし、より大きなハコが企業や都市のレベルを示すことだとみなされ、進んでいると考えられていた。そのような時に、コロナがやってきて、政府から、不要不急の時以外はハコに行くなといわれたわけである。

ハコからの脱却は、室内からの脱却ということでもある。僕はこれを、もう一回外を歩くことだと理解した。都市計画では、コンパクトシティということが、叫ばれはじめていた。都心の大きなハコで働いて、遠くの郊外に住むという二〇世紀のライフスタイルを続けると、都市はどんどん拡大していつてしまい、通勤と輸送にかかるコストやエネルギーを拡大する一方となる。地球温暖化にも歯止めがきかない。オフィスの近くに住んで、通勤の距離を縮めようというのが、コンパクトシティの考えである。都市計画の人たちは新しい言葉が好きで、スマート・シティという言葉も最近よく聞かれるが、どちらも、ハコ自体を解体しようという意識はギハク<sup>a</sup>のように見える。ハコを作る建設産業をエンジンとして回転していた、二〇世紀の産業資本主義システムは、いまだに健在なのである。都市計画も建築業界も、イゼン<sup>b</sup>としてその利益共同体の傘下にあり、それを前提としてのスマート・シティなのである。

新しいテクノロジーでエネルギー消費を削減するといっても、ハコを温存する限りは、ただハコが重装備になるだけで、ハコの値段が上がるだけで、都市の息苦しさは、いつまでたっても解消されない。新しい交通も結構であるが、歩くことは、単なる移動ではない。<sup>⑦</sup> 歩くこと自体が最も重要な時間となり、最も重要な時間を与えてくれるのである。

ハコにこだわるといことは、室内にこだわっているということと同義である。人間が室内に暮らすようになったのは、エアコン(空調)という悪魔的な機械が登場してからであり、それほど歴史は古くない。学生の頃、僕は世界の集落の調査に明け暮れていたが、集落において、室内で人間が過ごす時間は驚くほどに短かった。殆ど<sup>ほとん</sup>どの時間を人々は、外部か、あるいは縁側、ベランダのような中間領域で快適に過ごしていた。

一八世紀のイタリアのジャンパティスタ・ノリが描いた地図(一七四八)は、当時もまだ室外というものがいかに重要な生活空間であったかを示している。ノリはローマの市街地を、白と黒の二色に塗り分けているのだが、建築が黒で、広場や街が白という通常の塗分けではない。誰もがアクセスできる空間は、外部空間だけでなく、教会堂も含めて白であり、個

人の邸宅のようにアクセスできない空間だけが、黒なのである。これを見た時、東京にはほとんど白い空間がないと感じた。誰もがアクセスできる白がネットワーク上につながって、都市の主役となっているローマを、うらやましく感じた。東京においては、道路もまた、車という「私」によって占有されている黒い空間であり、白は限りなく小さく、その小さな空間に人がひしめきあって、コロナのオンショウの「密」空間が生まれたのである。

二〇世紀におけるエアコンの発明によって、室内は密閉され、エアコンは室内の温度を下げるのとは逆に、室外の温度を上昇させ、室外はいよいよ不快な空間となった。二〇世紀に登場したもうひとつの大きな技術、車によって、室外はいよいよ不快で人のいられない場所へと落ちていった。ノリの地図では白い場所だったはずの街路が、車とエアコンによって、どんどん黒く汚されていったのである。そのプロセスの果てに、地球温暖化が進行し、地球温暖化はグローバルなレベルで街路という居場所を、人間からウバオウとしているのである。

(隈研吾『コロナの後の都市と建築』による)

問一 二重傍線部(a)「キハク」、(b)「イゼン」、(c)「オンショウ」、(d)「ウバオウ」のカタカナを漢字にしなさい。ただし、必要に応じて送り仮名も付すこと。

問二 空欄 A ～ D にあてはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ すなわち ウ そして エ むしろ

問三 傍線部② 「鉄のハコ」とは具体的に何のことか。自分で考えて答えなさい。

問四 本文中に二箇所ある、空欄③に共通してあてはまる漢字二字の言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問五 傍線部④ 「やればできたものを、やらないままにいたつけが、このような形でわれわれに降りかかってきた」とあるが、「このような形」とは具体的にどういうことか。「こと。」につながるように、これより後の本文中から三十五字で探し、その最初と最後の四字ずつを答えなさい。(句読点や「」などの記号も一字とする)

問六 傍線部⑤ 「そのような女性」とはどういう女性のことか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問七 傍線部⑥ 「歩くこと自体が最も重要な時間となり、最も重要な時間を与えてくれる」とはどういうことか。適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 長時間室内に閉じこもっていることによる体調の乱れを整えてくれるということ。

イ 頭の中で様々なことを考え、普段思いつかない新鮮な発想が生まれるということ。

ウ 疲れたら公園のベンチで休む等、自分のペースに合わせて移動できるということ。

エ いつも一人でいることによつて人との距離を自由に選ぶことができるということ。

問八 傍線部⑦ 「エアコン(空調)」という悪魔的な機械」とあるが、なぜそう言えるのか。その理由を次から選び、記号で答えなさい。

ア 温湿度が自動的にコントロールされることで、本来人間が持つ体温調節の能力を奪うから。

イ 室外の温度を上昇させることで、室外を不快な空間へと変え、地球温暖化を促進するから。

ウ 常に快適な温湿度に保たれることで、ハコ自体を解体しようという意識が生まれないから。

エ エアコンを動かすためには、有限の資源である化石燃料を大量に消費することになるから。

問九 傍線部⑧ 「今、コロナの後に、われわれは、どのような都市を作り、どのような建築を作らなければいけないのだろうか」とあるが、この問題提起に対する答えを本文中の言葉を使って書きなさい。

《問題は次のページに続きます》

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には一部改めたところがある)

「ある神社に、落ち葉に「お告げ」をくれるミクジという猫がいた。大学生の主人公は、このミクジからもらったあるお告げの言葉を半信半疑ながら気にかけている。」

次の週に、またひとつ面接があった。福祉関係の仕事だった。

「学業以外で、何か力を入れたことはありませんか」

顎髭あごひげの豊かな面接官にそう聞かれて僕は「きた！」と思った。用意していた通り、勢いよく答える。

「一日一善のポイントカードを作って、毎日つけていました」

これだ。人とおちよつと違う、ユニークな回答。面接官に印象づけるような。考えたのは僕じゃないし、実際やってるわけじゃないけど、嘘うそも□□というやつ。

「それはおもしろいね」

面接官が机の上で両手を組んだまま言った。

やっぱりこれが①ミクジのお告げだったんだ。この面接、通るかもしれない。面接官が姿勢を崩さず畳みかける。

「どんなことが田島くんの善ですか」

ギクリとしたが、僕は作り笑いをキープしながら答えた。

「道に落ちていたゴミを拾うとか、電車でお年寄りに席を譲るとか」

「なるほど。ではポイントがいっぱいになったら、何がもらえるんですか」

②面接官が唇の端を片方だけ上げた。好意的な笑みではないことが、すぐにわかる。まずい、そこまで考えていなかった。

心拍数が上がってきたのなるべく意識しないように、僕はしどろもどろになって答えた。

「えっと……いいことがある、とか」

「いいことって？」

「……それは」

③答えられなかった。竜三さんだったら、なんて言うんだろう。膝の上で握った手に汗がにじむ。

「自分にいいことが起きてほしいから、ゴミを拾ったり席を譲ったりするんですか？ それは見返りを期待した偽善だとは思わない？」

偽善。かあつと顔が熱くなった。そうだ。その通りだ。

「……そうかも、しれません」

にせものの笑顔を続けていたせいで、頬ほほの筋肉がつれている。お門違い(a)に竜三さんを恨みたいような気持ちにもなった。そのあとの質問にも満足に答えられず、僕はうなだれた偽善者のまま面接を終えた。

竜三さんが来月いっぱいバイトを辞めてしまうと聞かされたのは翌週のことだ。シフトがふたりとも早番で、<sup>(b)</sup>誘われるまま帰りに寄ったマクドナルドで告げられた。④もしかしたら竜三さんは、僕にそれを伝えるために声をかけてくれたのかも知れない。

「オレのバンド、デビューできるかもしれないんだ」

カウンター席に並んで座り、百円のホットコーヒーを飲みながら竜三さんが言った。指と声が、少しだけ震えていた。

動画サイトを見たプロダクションから声がかかったらしい。大手ではないけど、所属しているアーティストを聞くことそれなりに実績のある会社だった。

「そんなすぐにバイト辞めなくなつて……」

「うん……でも、オレの気持ちの問題なんだ。もちろん売れるまではまだバイトして食いつながなきゃだけど、今は少しの間、曲作りや練習だけに全力かけたい」

竜三さんの口調は穏やかだけど熱がこもっていた。反して僕の心は冷えていく。

ふたつの感情が生まれていた。ひとつ。驚くべきことに、僕は竜三さんがいなくなることを寂しいと思っているのだ。そしてもうひとつ。竜三さんが夢をかなえようとしていることに対して、おもしろくないと思っているのだ。

どちらも予想外で僕は自分自身に戸惑い、苛立ちを鎮めようとコーラをずずすとすすった。マクドナルドのコーラはしつかり濃い味がする。竜三さんが言った。

「おまえもがんばれよ、就活」

竜三さんに肩をポンッと叩かれて僕は思わず、振り払うように体をよじった。

「いいですよ、竜三さんにはギターがあつて」

え、と竜三さんの口が半開きになる。僕はふつふつと湧き上がってくる憤りをどうにも抑えられなかった。「自分にしかできないようなことがあって、フリーターしながらお気楽に生きてて、夢もかなっちゃうんですか。すごいですね。何をやりたいのかもわからない僕とは大違いです」

冗談っぽく明るく言ったつもりだったけど、いくつも棘が飛び出てしまう。怒ってくれ、止めてくれ、と僕は思った。でも竜三さんは手元の紙コップを両手で包むようにして見つめながら、ぽつんと言った。

「オレにしかできないことなんて、ないよ」

その声があまりにも儂はかなくて、ドキリとした。竜三さんは

⑥。

「大学って、どんなところ？」

唐突な質問だ。この話の流れで、なんでそんなこと。

「どんなって……」

「オレさ、大学受験しなかったんだ。勉強得意じゃなかったけど、兄ちゃん見てて、いいなああって。サークルとかゼミとかさ。でも親に却下された。ウチはそんな金ないって。お兄ちゃんの特待生で大学行ったけど、あんた頭悪いんだから受けたってしょうがないわよとか。酔っぱらった父ちゃんに、貧乏なせいで安い酒しか飲めねえ、子ども四人もいらなかったなあって言われたこともある」

竜三さんは

⑦。

抑揚のないその話し方が、かえって竜三さんの悲しみをリアルに浮きだたせていた。僕は相変わらず気の利いたことも言えず、押し黙る。竜三さんはちよつと声のトーンを上げた。

「まあ、そうだよなーって、納得と反発をこめて、高校卒業してからは親から離れて好きなことだけやることにした。そこからデモテープ何本もいろんなことに送って、ライブできるようにあちこち足運んでかけあって。ここまで続けてきてやっと認めてくれるプロダクションが現れたんだ。だから今となっては、ハングリー精神を養ってくれた親にも感謝」

竜三さんはそう言うときとコーヒーを飲みほし、

⑧。

最後のひとことはなんだか無理やり自分に言い聞かせているようにも見えた。彼は唇をぎゅつと結んだあと、体ごと僕に向き直った。

「なあ、慎。自分にしかできないことって、そんなのあるのかな。オレがギターをやめたって、誰も困らない。バンドから抜けたって、誰か別のギタリストが入るだけだよ。オレより何倍もうまい奴が□の数ほどいる」

僕を食い入るように見つめる竜三さんから、目がそらせない。竜三さんはこわいくらい静かに言った。

「オレにしか弾けないギターなんてない。ただ、オレだから弾けるギターがあるって、そう思うんだ。オレが唯一こたわってプライド持ってるのは、そこなんだ」

すみませんでした、竜三さん。謝りたかったけど、うまく言葉にできなかった。自分の何がどう悪いのか、確証が持てなかった。ひとつだけ気がついたのは、竜三さんの人知れぬ努力とか苦労とか悩みとか葛藤とか、そういうものを僕はまったく見過ごして、彼が最初から自分の欲しいものをたやすく手にしてのほほんと生きてるなんて、ずっとそう思っていたってことだ。

「竜三さん、僕……」

そう言ったとき次の言葉が出ない僕に、竜三さんは

⑨。

「おまえにもあるよ。慎にしかできないことって考えたらしんどいかもしれない。だけど、慎だからできるんだってことが、きつとある」

少しの間、沈黙になった。僕は耐え切れなくなって、必死で言葉を探した。

「……竜三さんのポイントカードは、いっぱいになったら何がもらえるんですか」

「うん？ すっげえ喜びがもらえる」

竜三さんは笑って、紙コップをペコつとつぶした。なんだ、それじゃあ僕の「いいことが起きる」とたいして変わらないじゃないか。はぐらかされた気がしたけど、僕はそれ以上追及できなかった。

(中略)

内定がひとつも出ないままの僕を、父さんがとうとう見かねたらしい。不動産会社を経営している遠縁の親戚がいるから、話を通してやってもいいと言ってきた。

そんな切り札があるのなら最初から言ってくればいいのという想いが胸をかすめる。そして次の瞬間、ざらついた舌でなめられるような不快感を覚えた。すぐにはわからなかったけどそれは、世話してもらうのが当たり前前みたいに思っている自分への嫌悪だった。でも、だからといってそんないい話にのらない潔さは持っている。べつに悪いこととしてるわけじゃないんだからと、僕は初めて芽生えた感情を押しつぶす。

数日後、父さんから「一応、形だけでも面接しようって言ってきたぞ」と言われた。一応。形だけでも。話は通ったということだ。

よかった。よかったじゃないか。これで決まりだ。不動産会社って何をすればいいのかよく知らないけど、そんなことは入社してから教えてもらえばいい。ほつとしていいるはずなのに、なぜだか僕は落ち着かない気持ちになった。

日程をすぐに指定されたので、父さんから渡された社名と住所を元に、僕は会社への行き方をネットで調べた。うちからは遠く離れた場所にあつて、聞いたことのない駅から歩いて二十分ほどかかりそうだった。まあ、いい。スマホのマップアプリでなんとかなるだろう。

それで今日、僕はスマホを片手に、知らない町に降り立った。単線の駅は小規模な商店街に続いていて、そこを抜けたら田んぼの中にぼつんぼつんと民家があるような田舎道だった。マップアプリに社名を打ち込むと、あっさり経路が出る。自分のいるところに青、会社に赤のマーク。地図の上でつながれた線の通りに、ただ歩いていけばいい。

便利だな。こんなふうには、これからの人生も道順をはっきり示してもらえればなんの無駄もない。ナビに従っていけば、問題なくたどりつく。

……問題なく。そうかな。問題ないのが問題ってことも、あったりして。

ぼんやりしながら歩いていたら、手をすべらせてスマホを落とした。拾い上げたスマホは画面が真っ暗だった。

やばい。冷や汗をかきながら電源ボタンを何度か押ししてみる。衝撃で一度シャットダウンしたスマホは、しばらくすると息を吹き返した。

胸をなでおろし、あらためてアプリを立ち上げる。社名を打ち直すと会社の場所に赤いピンがついたが、自分の居場所を示す青い丸がひよこひよここと動き出して定まらない。GPSがうまく作動していないらしかった。

僕はあたりを見回す。ここはどこだ？ スマホの画面ばかりに集中していたので、周囲をよく見ていなかった。スマホに出ている地図にはめばしい目印はほとんどなく、ただ細い道が交差している。道の脇にもなにかしらのビルや家があるのに、地図の上では空白が広がっているだけだ。唯一、途中にガソリンスタンドのマークがあるけど、見渡す限りそんな看板はない。

青い丸は挙動不審にうろろし続けている。なんだか僕みたいだ。せっかく行き場を示されているのに、自分の立ち位置がわからないせいで結ばれることのない点と点。

……ポイントと、ポイント？

そう思ったとたん、はっと目の前がクリアになったような気がした。

僕は。

僕はずっと、どこへ行けばいいのかわからないって思っていた。何を選べばいいのか、何を決めればいいのか。先にある終着点だけを探していた。でも、それよりも前に、もっとわかっていることがあった。

まず知るべきは、目的地じゃない。

⑪ だったんだ――。

(青山美智子『猫のお告げは樹の下で』による)

問一 二重傍線部(a)「(お)門違(い)」、(b)「誘(われる)」、(c)「抑揚」、(d)「葛藤」の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 波線部A「嘘も□□」、B「□の数」の□にあてはまる漢字をそれぞれ答えなさい。

問三 傍線部①「ミクジのお告げ」とあるが、この「お告げ」にはある言葉が一語で書かれていた。その語を本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部②「面接官が唇の端を片方だけ上げた」とあるが、この時の面接官の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア どんなに良い答えを返してくれるのかと期待している。

イ どうせたいした答えなど返せないだろうと思っている。

ウ 自らの返答で苦しい状況になった学生を激励している。

エ 期待したような返答でなかったのがっかりしている。

問五 傍線部③・④の「られ」と同じ働きをしている「られる」を含む文を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 両親からほめられることは誰でもうれいものである。

イ 古いアルバムを見て昔のことがなつかしく感じられる。

ウ どんなものでも食べられるようにしなくてはいけない。

エ お忙しい中、わざわざ担任の先生が同窓会に来られる。

問六 傍線部⑤「ふつふつと湧き上がってくる憤り」とあるが、この時の僕の心情を表現した一文を本文中から探し、その最初の十字を答えなさい。

問七 空欄⑥⑦にあてはまる言葉を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ふう、と息をついた

ウ くしゅつと顔を崩した

問八 傍線部⑩「初めて芽生えた感情」とはどのような感情か。本文中から三十字以内で探し、その最初と最後の五字ずつを答えなさい。

問九 空欄⑪にあてはまる漢字三字の言葉を自分で考えて答えなさい。

三、次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

① さしたることなくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事果てなば、とく帰るべし。久しくゐたる、いとむつかし。

人と向かひたれば言の葉多く、身もくたびれ、心もしづかならず。よろづこと障りて、時を移す、互ひのため、いと益なし。厭はしげに言はむも悪し。心づきなきことあらむ折は、なかなかそのよしをも言ひてん。

同じ心に向かはまほしく思はむ人の、つれづれにて、「今しばし、けふは心しづかに」など言はむは、この限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。

そのこととなきに人の来て、のどかに物語りして帰りぬる、いとよし。文も、「久しく聞こえさせねば」などばかり言ひおこせたる、いとうれし。

※1 人のがり || 人のもとに。

※2 いとむつかし || ひどく厄介だ。

※3 厭はしげに || 不愉快そうに。

※4 心づきなきこと || その気になれないこと。

※5 なかなか || かえって。

※6 つれづれにて || 退屈していて。

※7 阮籍 || 中国、魏・晋の人。好ましい人物には青い眼で、気に入らない人物には白い眼で対した。

※8 文 || 手紙。

※9 「久しく聞こえさせねば」などばかり言ひおこせたる || 「長いことお便りを差し上げていませんので」などだけ言っよこしてきのは。

問一 二重傍線部(a)「向かひたれば」、(b)「けふは心しづかに」の本文中での読みを現代仮名づかいに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問二 傍線部①「さしたることなくて」とは、「特別な用事がなくて」という意味であるが、筆者は用事がある場合においてもどうするのがよいと言っているか。現代語で答えなさい。

問三 傍線部②「そのよし」とはどのような内容か。次から選び、記号で答えなさい。

- ア 静かに話をするのが好きなのだということ。
- イ 話してもお互いにとって無益だということ。
- ウ 時間の浪費もやむを得ないということ。
- エ 今日話をする気にはなれないということ。

問四 本文における筆者の主張として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア どんな人でも面と向かえば話すことは自然と増えてしまうものだが、静かに話を続けていけば不思議と疲れない。
- イ 用事もないのに人のもとに行くのはよくないが、同じ心持ちで相対したいと思う人ならば会っても差し支えはない。
- ウ 自分と同じような心持ちで対座していたいと思わせるような人であっても、常に直接話したいというわけではない。
- エ 手紙はどのような内容のものでももらえればうれしいものであるが、せめて時候のあいさつぐらいは書いてほしい。

問五 本文の出典である『徒然草』の作者は誰か。次から選び、記号で答えなさい。

- ア 清少納言
- イ 松尾芭蕉
- ウ 兼好法師
- エ 紀貫之